

信行要文④ 第八回 法華講夏期講習会 第四期

皆さん、こんにちは。

今回は、本年度の法華講夏期講習会の第四期に当たります。従来の講習会とは少し方式を変えまして、本年度は、第一期から第四期までは一般の方に参加していただき、第五期は青年部の方を中心にして講習会を開こうと考えておりますので、今回は一般の方を対象とした最後の講習会であります。

暑いなか大変でございますが、この総本山においてしっかりと信行を重ねられ、これからの戦いに臨んでいただきたいと思います。

さて、テキストを開いてください。本日は十三番目の『富木尼御前御書』からお話をしていきたいと思えます。

13 富木尼御前御書

病なき人も無常まぬかれがたし。但しとしのはてにはあらず。法華經の行者なり。非業の死にはあるべからず。よも業病にては候はじ。設ひ業病なりとも、法華經の御力たのもし。阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ、陳臣は十五年の命をのべたり。尼ごぜん又法華經の行者なり。御信心は月のまさるがごとく、しをのみつがごとし。いかでか病も失せ、寿ものびざるべきと強盛にをぼしめし、身を持し、心に物をなげかざれ。（御書九五五〇八行目）

この御書は、建治二（一二七六）年三月二十七日、日蓮大聖人が五十五歳の時、身延から富木女房尼御前に送られた御消息であります。

富木常忍が、亡くなった自分の母の遺骨を抱いて、下総国（千葉県）から身延の大聖人様を訪ねた際、奥さんが病気であることを大聖人様に御報告しました。それを聞いた大聖人様が富木常忍に託して、病気の尼御前に与えられた御書であります。その富木常忍は下総に帰る際、大聖人様が書写された持経を身延に忘れてしまいまして、大聖人様はそのお経と『忘持経事』という御書をお弟子に持たせて遣わしたのですが、その『忘持経事』のなかに、

「今常忍上人は持経を忘る。日本第一の好く忘るゝの仁か」（御書 九五六〇）とおっしゃっております。

さて、この御書の内容は、初めに御供養への謝辞が述べられたのちに、はるばる富木常忍が身延へ訪ねてこられたことについて、夫を身延の山に送り出したのは妻の力である、と内助の功を讃えられ、

「やのはしる事は弓のちから、くものゆくことはりうのちから、をとこのしわざはめのちからなり。いまときどののこれへ御わたりある事、尼ごぜんの御力なり。けぶり

をみれば火をみる、あめをみればりうをみる。をとこを見ればめをみる。今ときどのにげさんつかまつれば、尼ごぜんをみたてまつるとをぼう」(同 九五五^ぎ)

と仰せになっているのです。解りやすく申しますと、「矢が飛ぶのは弓の力である。雲が動くのは竜の力である。男の働きは女の力である。今、富木殿がこの身延の山にいらっしやったのは、良き女房である尼御前の力にほかならない。煙を見れば火を知る。雨が降れば竜を知り、男を見れば女が判る。この譬えのように、今、富木殿に会ってみると、尼御前にお会いしたように思えるのです」とおっしゃっているのです。

昔も今も同じでありまして、夫婦の力というものは非常に大事であります。特に大聖人様は「をとこのしわざはめのちから」と仰せになり、御主人がしっかりと働けるのは、また信心を強盛に励めるのは、ひとえに奥さんの力であるとおっしゃっているわけです。これは皆さん方もよく御存じのことだと思います。

広宣流布の戦いというものは、個人の戦いではなくして、家族なら家族、講中なら講中という、全体の大きな力が必要であります。そういう意味からも、やはりそれぞれが助け合って、切磋琢磨しつつ精進していくことが極めて大事であると思います。

また、奥さんが病気でありましたから、その病気を見舞われ、家を守って健気に法華經の信心をしている奥さんを褒めていらっしやるということが、この御文からも拝することが出来ます。

まず初めに「病なき人も無常まぬかれがたし。但しとしのはてにはあらず。法華經の行者なり。非業の死にはあるべからず」とあります。「無常」というのは、この場合は人の死を指します。すなわち病気でなくとも、死ぬ時が来れば人は死ぬということです。しかし、あなたは老いて死ぬほどの年ではない。しかも、あなたは法華經の行者であるのだから、寿命を全うせずに非業の死を遂げることはない、と仰せであります。

ここにある「法華經の行者」ということについては、御承知のとおり、総別の二義が存します。総じては、法華經の教えに従って修行するすべての者のことを言います。つまり、三大秘法の御本尊様を信じて実践修行する我らも皆、法華經の行者と言えるのです。

しかし、別しては『撰時抄』に、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし。これをもってすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず」(同 八六四^ぎ)

と仰せられているように、法華經の行者とは日蓮大聖人様のことなのであります。すなわち、過去に法華經を読まれた方は天台、伝教等、数多くいますが、身口意の三業にわたって法華經をお読みになられた方は、宗祖日蓮大聖人様ただお一人だけであります。つまり大聖人様お一人が、法華經に予証されたお振る舞いをもって法華經の行者であることを実証されたのであります。

その法華經の行者について『御義口伝』には、

「如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり(中略)されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五^ぎ)

とあります。つまり法華經の行者とは本地無作三身の仏、久遠元初自受用身のことを仰せられているのであり、末法の法華經の行者とは、言葉を換えれば末法の御本仏という

ことなのであります。

また、末法の法華經の行者は末法の御本仏なるが故に、釈尊との比較を供養の軽重に寄せて示されております。例えば『国府尼御前御書』には、

「釈尊ほどの仏を三業相応して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも、末代悪世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりととかれて候。まことしからぬ事にては候へども、仏の金言にて候へば疑ふべきにあらず」(同 七三九頁)

とおっしゃっています。

また『法蓮抄』には、

「十号と申すは仏の十の御名なり。十号を供養せんよりも、末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかゝれたり」(同 八一三頁)

と述べられております。ここに仰せの「十号」とは、仏様の十種の尊称であります。一つには如来で、これは一切諸法の根本の真理を体現して、三世にわたる因果律を証得された方という意味です。二番目は応供で、これは人天の供養を受けるに足る者を言います。三番目の正徧知は正等覚とも言いまして、一切の智を具えて諸法をあまねく正しく理解する者との意であります。四番目の明行足は三世に通達し、善行を修して満足をする者のことです。五番目が善逝で、無量の智慧をもって迷いの世界をよく超え出て、八正道を行じて仏の境地に達する者のことでもあります。六番目の世間解は、因果の理法を悟って世間・出世間のことをよく理解する者、七番目の無上士は、衆生のなかでこの上なく勝れている者、八番目の調御丈夫は一切衆生を調伏し、制御して成仏させる力を具えている者を言います。また九番目が天人師で、これは天と人の師匠ということであり、あらゆる人を指導し、師匠となれる者のことです。そして最後の十番目が仏世尊です。仏とは智や徳が円満で、目覚めた者という意味で、世尊とは世のあらゆる人から尊敬される者のことでもあります。これらが十号であります。

大聖人様はこれらの御文によって、釈尊を供養するよりも末代の法華經の行者を供養する功德のほうが勝れていることをお示しなのであります。

このほかにも『新池殿御消息』には、

「況んや法華經の行者を供養せん功德は、無量無辺の仏を供養し進らする功德にも勝れて候なり」(同 一三六三頁)

とあり、釈尊ばかりではなく、無量無辺のあらゆる仏を供養するよりも、法華經の行者を供養することの功德のほうが勝れていると説かれているのであります。

これらの御文を拝して解るように、釈尊および十方の仏様を供養する功德よりも、法華經の行者を供養する功德のほうが勝れているのです。このことは取りも直さず、釈尊より法華經の行者それ自体のほうが勝れているという意味を示しているわけでありませぬ。なぜなら法華經の行者とは、別しては本地無作の三身の仏様、すなわち久遠元初自受用身の御本仏、宗祖日蓮大聖人様を指し給うからであります。

ただし、この御文のなかでは、尼御前を指して法華經の行者と仰せられており、これは総じての意味であります。尼御前の強盛なる信心を褒め讃えて、かくの如く尼御前に対して仰せられているのであります。

次に「よも業病にては候はじ。設ひ業病なりとも、法華經の御力たのもし」とあります。尼御前の病氣は、よもや業病とは思われないが、たとえ業病であったとしても、

法華經の力によって必ず治癒できるという意味です。ここでは、信心によって病気を克服し、さらに強い確信が生まれることを述べておられるのです。

ここで仰せの「業病」とは何かと言いますと、前世の悪業の因縁によってかかるとされる、治りにくい病気、難病のことです。

そもそも病気について、大聖人様は『太田入道殿御返事』のなかで『摩訶止観』を引かれて、

「病の起こる因縁を明かすに六有り。一には四大順じゆんならざる故に病む、二には飲食節おんじきせつせざる故に病む、三には坐禅ととの調はざる故に病む、四には鬼便りきたよを得る、五には魔の所為、六には業の起こるが故に病む」(同 九一一頁)

と仰せになっております。

一番目に「四大順ならざる故に病む」とありますが、四大というのは万物の構成要素とされる地水火風の四つを言います。これを人間の身体に当てはめると、地とは骨や筋肉のことを言い、水とは血液のことです。火は熱、体温のことであり、風とは人間の呼吸を言うのであります。これら四大の調和が崩れることによって病気が起こると仰せなのです。

例えば、寒い時期に薄着であれば、結局、風邪を引く原因を作るわけであり、四大不調ということになるのです。最近の方々はあまり使わないようですが、昔の方は身体の調子が悪いと「今日は四大不調につき、お休みさせていただきます」などと言ったようであります。つまり少し熱が出たときや、腰が痛いときなどには「四大不調なので休みます」という表現をしていたのであります。四大が順でない、不調であることによって病気が起こると言うことを言っているのであります。

現代は夏でも冷房がよく効いていますから、汗をかいたまま、それをぬぐわずに涼しい部屋に入ってしまうと風邪を引いてしまうということもありますので、気をつけなければなりません。

二番目に「飲食節おんじきせつせざる故に病む」とありますのは、飲食いんじよくが節せつでないということです。節とは何かと言え、ものの区切りのことで、つまり飲み食いに節制がないことを言うのであります。

例えば、決まった時間に食事をしないこともそうであります。夜中に酒を飲んで、たくさんのごちそうを食べてしまう。そんな暴飲暴食を続けていけば、必ず病気になってしまいます。テレビなどで見聞するところでは、最近は朝御飯を食べない子供達が多いそうであります。子供が食べないのは、どうやら、そもそもお母さんが作らないようなのです。こういったことも、子供の健康にとっては非常によくはないことなのです。教育番組などを見ても「子供には必ず朝御飯を食べさせてください」と言っているのですが、どうもお母さんのほうが作ってくれない場合もあるようです。また、コンビニエンスストアで何かを買ってきて、それを食べさせて済ますというケースもあるようです。

やはり、こういった飲食については節目節目せつに正していかなければなりません。健康を維持していくためには、まず飲食が節でなければならぬのであります。

次に「三には坐禅ととの調はざる故に病む」と仰せです。「坐禅」というのは、よく禅宗などで行っている座り方と考える人もいるかも知れませんが、基本的には精神を統一して真理を徹見することを言います。つまり坐禅が調わないということは、身体の動作や

精神状態が不安定で乱れていることを言うのであります。

人間は朝起きて、夜は寝ることが自然の摂理であります。これが逆になって、昼に寝て、夜に起き出し、その上、夜中に暴飲暴食をしたら、身体を壊してしまうのは当たり前であります。もちろん、世間は広いですから、夜に働くことを仕事としている方もいらっしゃると思いますが、できるだけ、やはり自然の摂理にかな適った生活環境を作っていないかなくてはならないと思います。

そのような昼夜逆転の生活をしていると、生活の乱れから身心も乱れ、様々な病気を呼ぶことになってしまうのです。また、それによって精神的にも不安定になってしまいます。夜いつまでも起きていて、朝起きられない。それで結局、朝の勤行もしないで朝寝ばかりしている。このような状態では身心怠慢となって、病魔を呼び寄せる原因を自らが作ってしまうことになるのです。

先般、ある討論番組を見たなかで、女性の方がおっしゃっていたことがあります。この方はどんなことがあっても朝、毎日必ず同じ時刻に起きるそうであります。どうしても眠いときは、昼寝を十分か十五分間することにして、朝は決まった時刻に起きることに生活の基準を置いているそうであります。この方がおっしゃるとおり、やはり生活をしっかりと組み立てていくということは、とても大切なことです。まさに「坐禅調はざる」の逆で、きちんと調べていけばいいのです。我々もそれに気をつけて、朝の勤行をしっかりとしていくということが大切なのです。

次に「四には鬼便りを得る」とありますが、この鬼とは鬼神のことで、鬼神とは目に見えない、超人的な用きはたらきを持つものに対する総称であります。

仏法においては、様々な鬼神が説かれております。例えば夜叉やしや、羅刹らせつ、あるいは阿修羅あしゅら、また梵天ぼんてん、帝釈たいしゃくなどがおり、これらは皆、鬼神と呼ばれております。特に、人の功德や生命を奪いむしばむ用おにきをするもの、また恐ろしい鬼、たたりなどをする鬼神のことを悪鬼神と呼んでいます。法華経の勸持品に、

「悪鬼其の身に入る」(法華経 三七七ぢ)

という経文もありますが、夜叉、羅刹、阿修羅などが悪鬼神と呼ばれるものです。

これとは逆に、仏法を護持して国土を守る鬼神もいます。これが梵天や帝釈などの諸天善神と言われる方々で、これを善鬼神と呼ぶのであります。

なかでも夜叉などの悪鬼は、我々が邪念を持つことによって便りを得て、それに乗じて人間の四大、骨や筋肉、血液、体温、呼吸などの病気を呼ぶのです。あるいは五臓六腑、心臓・肺臓・肝臓・脾臓・腎臓などに悪鬼が入り込んで、病気を呼ぶことになるわけです。これを現代的に言いますと、肉眼や顕微鏡でもなかなか見えないような、小さな病原菌などによる病気のことであるとも言われております。

これらは皆、鬼が便りを得て起こすものでありますから、こちらから便りを与えなければ起こらないのです。我々がだらしない生活をしたり、不信心になってしまうことで、鬼に便りを出すことになってしまうのです。すると、そこへ悪鬼が入ってきて、おなかおなかが痛いだとか熱が出たということになってしまうのであります。

次に「五には魔の所為」とありますが、魔というものは、なかなかやっかいです。魔の代表といえば第六天の魔王であります。この魔王の様々な仕業しわざが病気を起こす原因になっているのです。

我々の成仏を妨げるのが魔であります。煩惱、疑惑、または懈怠^{けだい}などは皆、魔の所為であります。気持ちは前向きなのだけれども、どうもうまくいかない。折伏をやりたいのだけれども、身体が動かない。勤行をしたいのだけれども寝てばかり。布団のなかでお題目を唱えたり、五座三座の勤行をやったとしても、これはやったことにはなりません。こういう心は、やはり皆、魔に負けているのであります。

為^なすべき時にやらない、折伏がなかなかできないというのは皆、魔に負けてしまっているのです。「よし、やるぞ！」と奮起して立ち上がれば、魔は逃げていってしまうのです。この原理をしっかりと解らなければいけません。

いつも申し上げていることですが、魔は仏様には絶対に勝てないのです。仏様は魔に負けないのです。ですから、御本尊様をしっかりと拝していけば、魔に負けることもないのです。しかし、どうも途中で足踏みをしてしまうというのであれば、それはまだまだ信心が確立していないということなのです。そういう時こそ、しっかりとお題目を唱えていくことが大事なのであります。

三障四魔の四魔というのは、煩惱魔・陰魔^{おん}・死魔・天子魔の四つの魔のことです。

一つ目の煩惱魔というのは、煩惱が心を悩乱させる魔です。つまり仏道修行者が菩提を得ようとする、その智慧の命を奪ってしまう魔^{はたら}が用くわけです。やろうと思っても、邪魔するものが出てくるといふ魔であります。

次に陰魔^{しきじゆそうぎょうしき}というのは、五陰魔の略称であります。人間の肉体と精神を構成するものは色受想行識という五陰であり、この色受想行識の調和を乱す魔であります。この魔によって熱が四十度も出てしまうと、いくら一生懸命に頑張ろうと思っても、なかなか頑張れなくなってしまいます。あるいは、今日はお山へ行って、しっかりと修行してこようと思っても、朝になったら体調が悪くなってしまふといったように、油断をしていると、そういう魔が起きるのです。我々人間を構成している肉体と精神の五陰、色受想行識に支障を来たす魔が生まれてくると、こういうことになるのであります。

また死魔とは、仏道を修行する者が死によって修行を続けることができなくなってしまうこと、あるいは身近な人が死んでしまうことによって正法への疑いを起こさせるような魔を言います。

えてして「信心をしているのに、なぜなんだ」というように疑ってしまう人がいるのです。しかし、そこに魔が付け入る隙^{すき}があるので、御本尊様第一であるとの絶対信を持つことが大事なのです。それがないと「どうも…」といて悩むようになる。

だいたい、こういう人に限って「自分は一生懸命やっているんだけど…」と言うのだけれども、こういうことを言う人は、本当はやっていないのです。あくまで、やっているつもりなだけで、自分ではそのつもりだけれども、実際はきちんとやっていない場合が多い。仏様は全部、御照覧られるわけだから、やっているか、やっていないかぐらひは、ちゃんと判っていらっしゃるのです。自分で自分をごまかしてもだめなのであって、御本尊様の前では正直になることが大事です。もし信心が足りなかったら「まだ足りませんが、これから一生懸命に頑張ります」とお誓いすればいいのです。そういう素直さが、信心では必要なのだと思います。

それから、最後の天子魔は先程言った第六天の魔王のことで、これはなかなかやっかいなのです。それはどういうことかといいますと、この第六天の魔王というのは権力者

などの身に入って修行者を惑わせ、仏道を妨害する用きをします。ですから、この魔は一切の障魔の根源になると言われております。たしかに、そういうことが実際にあるわけでありますから、気をつけていかなければなりません。

大聖人様は『兄弟抄』に、

「魔競はずば正法と知るべからず」(御書 九八六[㊦])

と、正しい仏法を行じていこうとすれば、魔は必ず競い起こるとおっしゃっております。ところが『兵衛志殿御返事』に、

「凡夫の仏になる又かくのごとし。必ず三障四魔と申す障^{さわ}りいできたれば、賢者はよろこび、愚者は退くこれなり」(同 一一八四[㊦])

とおっしゃっているように、この障魔が起きた時こそ、成仏という大功德を得る絶好の機会と心得て、さらなる確信を持って自行化他の信心に励んでいくことが、極めて肝要であります。

では、魔が競い起きた時はどうするか。まず第一に、御本尊様への絶対の確信を持って、朗々と題目を唱えきっていくことでもあります。題目を唱えて魔に立ち向かっていけば、必ず魔は退散するのです。先程も言ったとおり、所詮、魔は仏様には絶対に勝てないからです。私達はこの題目を唱えて、魔をすべて退治していくという決意が必要ではないかと思えます。

以上、四魔について申し上げましたが、『止観』に病の起こる因縁を明かす、最後の六番目に「六には業^{ごう}の起こるが故に病む」とおっしゃっております。業というのは業病のことを言っているのでありまして、この業病とは前世の悪業を原因として起きる難病でありますから、これは身口意の三業にわたる様々な所作のことを言います。これを、未来に苦楽いずれかの果報を招く原因となるので、業因とも言います。このうち、過去世の業を宿業と言い、現世の業を現業と言います。現業というのは、我々が今世に生まれてから作った業のことです。

またさらに、この業は善悪に分けることができます。つまり善業と悪業です。我々は善業をたくさん積んでいく一方、悪業も様々に積んでいるケースがあるのです。一切の現象は因果の理法によって現れるのでありますから、今日の様々な苦楽の結果は、すべて業によって感ずるものであります。例えば、いかなる国に生まれたか、いかなる両親のもとに生まれたか、いかなる能力を先天的に持っているか、いかなる容姿に生まれたか、いかなる因縁を持って生まれるかなどは、すべて過去世における宿業のしからしむるところであります。

病気も同様でありまして、病気になるには病気になる原因があるのです。それが過去世の業によるのか、あるいは現世の業によるかは判りませんが、いずれにいたしましても宿業あるいは現業によって起きる病気は、難病とも言われているのであります。特に過去世における正法誹謗の原因、つまり謗法の報いとして起きる業病は、難病中の難病であると言われております。

しかし、大聖人様は『可延定業御書』に、

「夫病^{それ}に二あり。一には軽病、二には重病。重病すら善^{ぜん}医^いに値^あひて急^{たい}に対^じ治^いすれば命^{いのち}猶^{なほ}存^ぞす。何^{いか}に況^{いわ}んや軽病をや。業^{ごう}に二あり。一には定^{じょう}業、二には不定^{ふじょう}業。定業すら能^よく能^よく懺^{さん}悔^げすれば必ず消滅す。何^{いか}に況^{いわ}んや不定業をや。法華經第七に云はく『此の経

は則ちすなわ為れこ閻浮提えんぶだいの人の病の良薬なり』等云云」(同 七六〇)

と仰せであります。これを解りやすく言うと、「病には重病と軽病があるけれども、重病といえども良いお医者さんによって早く治療をすれば、回復して命を延べることができる。まして軽病は言うまでもない。また、業にも定業と不定業とがある。定業というのは過去の宿業によって未来に必ずその果報を受けると定められている業のことであり、不定業とは必ずしも果報を受けるとは決まっていない業のことであるが、定業でさえも、よくよく懺悔すれば必ず消滅することができる。まして不定業は言うまでもないことである。故に、法華経薬王品には『此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり』と仰せである」とおっしゃっております。

ここで「定業・不定業」と仰せられているのは、人の寿命のことを言われているわけでありましてけれども、病気においても同様であり、難病中の難病である業病といえども、よくよく懺悔すれば必ず治る、命を延ばすことができるとおっしゃっているのです。

では、この「能く能く懺悔すれば」とはどういう意味かといえ、懺悔というと世間一般の人は、すぐにキリスト教の神とか牧師に告白することのように思いますけれども、ここはそういう意味で言われているのではありません。法華経の結経である観普賢経には、

「若し懺悔せんと欲せばほつ 端坐たんざして実相を思え 衆罪しゅざいは霜露そうろの如し 慧日えにち能く消除す」
(法華経 六四八)

とあります。つまり、もし懺悔しようとするならば「端坐して実相を思え」と言われるのです。

「端坐」というのはきちんと座ってということですから。我々の勤行の時の姿勢も端坐でなければなりません。いい加減な姿勢で勤行をしてはいけません。やはり、きちんと背筋を伸ばして、しっかりと御本尊様を拝して勤行をするということが、極めて大事なのです。

今、お山には修行している小僧達がたくさんおりまして、今日の唱題行にも参加しておりましたが、あの小僧達に私は、あまり頻繁に細かいことを言わないようにしています。お山には小僧さんの生活全般について指導する学衆課というものがあまして、その人達がきちんと指導をしておりますから、色々な細かいことについては言いません。しかし、ただ一つだけ、私は勤行の姿勢については厳しく指導しております。丑寅勤行の時でも、ほかの時でも、きちんと勤行すること、つまり背節をしっかりと伸ばす、手をきちんと合わせる、ちゃんと御本尊様を正面に拝して勤行しなさいと厳しく指導しております。

御本尊様を見ないで下を向き、畳を拜んでも功德はないのであり、きちんと御本尊様を拝することが一番の根本になるわけです。まさに「端坐して実相を思え」とおっしゃっているとおりです。

では「実相」とは何かというと、これは『諸法実相抄』に、

「実相と云ふは妙法蓮華経の異名なり」(御書 六六五)

とおっしゃっており、この「妙法蓮華経」とは文底下種の三大秘法の御本尊様のことであります。つまり、御本尊様に過去遠々劫からの罪障消滅を心から願い、祈ることを「端

坐して実相を思え」と言われているのです。

そうすると、御本尊様への強盛なる祈りによって、たとえ過去の宿業によって業病に冒された人でも、「衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す」と仰せのように、つまり日の光によって霜や露がたちまちに消え失せるように、過去遠々劫からの罪障も消滅し、身の病も心の重罪も一時に消え去ることになるとおっしゃっているのです。

末法の正境たる文底下種の南無妙法蓮華經の御本尊を奉戴している我々は、この御教示を固く信じて疑わず、御本尊に対する絶対信を持って自行化他の信心に励んでいけば、たとえ業病といえども必ず消滅することができるのであります。ですから、病に対しては、まず絶対的にこの確信を持つことが肝要なのです。そして、この信心によってどんな病でも治していくぞという決意を固めることが大事であります。

また、もう一つ、病に対する考え方として、『妙心尼御前御返事』のなかで、

「又人の死ぬる事はやまひにはよらず。当時のゆき・つしまの子どもは病なけれども、みなみなむこ人に一時にうちころされぬ。病あれば死ぬべしという事不定なり。又このやまひは仏の御はからひか。そのゆへは浄名經・涅槃經には病ある人、仏になるべきよしとかれて候。病によりて道心はおこり候か」(同 九〇〇)

と、人が死ぬということは病だけによるのではないとおっしゃっているのです。例えば蒙古の来襲の時に、壱岐・対馬の方々は本当にひどい目に遭って殺されてしまったのです。あの方々が病はなくても死んでしまったように、人は病によって死ぬとは限っていないのだということです。人の死には色々なケースがあることを、まずおっしゃっているのです。

そして、病があれば必ず死ぬとは定まっていけないのであり、その上から「やまひは仏の御はからひか」とおっしゃり、また「そのゆへは浄名經・涅槃經には病ある人、仏になるべきよしとかれて候。病によりて道心はおこり候か」と続けられております。

たしかに『大白法』に載る体験談などを読みますと、まさに病を得たことによって信心が強盛になり、その病も克服した上で、本当に信心の喜びを感じている人がたくさんいらっしゃるのです。

ですか、病についてのとらえ方も二とおりあります。一つは病には絶対にかからない、どんなことがあっても冒されないという決意もありますが、もう一つは病にかかっても大丈夫だということでもあります。

ここに「病によりて道心はおこり候か」とあるように、たとえ病にかかっても、むしろ朗々とお題目を唱えていくことによって、三世の生命の上から永遠における幸せを掴むことができるということがあるのです。だから、色々な病があるけれども、病に冒された時には、まず御本尊様をしっかりと拝していくことが大事なのです。むしろ、その病を機として、さらに信心に励んでいくということが、極めて大切であると思います。

本文に戻ります。

「阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ、陳臣は十五年の命をのべたり」とおっしゃっておりますが、この御文は阿闍世王と陳臣の例を引いて、大聖人様が尼御前を励まされているのであります。

初めの「阿闍世王」については『可延定業御書』に、

「阿闍世王は御年五十の二月十五日、大悪瘡、身に出来せり。大医耆婆が力も及ばず、三月七日必ず死して無間大城に墮つべかりき。五十余年が間の大業一時に滅して、一生の大苦三七日にあつまれり。定業限りありしかども仏、法華經をかさねて演説して、涅槃經となづけて大王にあたえ給ひしかば、身の病忽ちに平癒し、心の重罪も一時に露と消えにき」(同 七六〇)

とおっしゃっております。

阿闍世王については皆さんも御承知だと思いますが、釈尊在世から滅後にかけての方で、父親は頻婆舍羅王、母親は韋提希夫人であります。この頻婆舍羅王は釈尊に深く帰依しており、阿闍世王を太子として育てて、また家来達も太子を善見と呼んでいたのです。しかし、阿闍世王は当時、釈尊に対抗して仏教教団を分裂させて新教団を組織していた提婆達多に心を寄せてしまうのです。提婆達多は自ら新仏を気取って釈尊に対抗しておりましたので、阿闍世王は提婆達多にそそのかされて逆心を起こしてしまうのです。

提婆達多にそそのかされた阿闍世王は、まず自分の父である頻婆舍羅王を幽閉して、食べ物を与えず、刀で父親の足底を削ったりするなど、極めて乱暴なことをするのであります。そこで奥さんの韋提希夫人は、牢獄にいる頻婆舍羅王をなんとか助けようと思い、全身に蜂蜜を塗って牢獄を訪ね、その蜜によって夫の命をつないだということです。

ところが、それを知った阿闍世王はたいへん怒って、今度は母親をも殺そうとするわけです。これは結局、耆婆大臣に諫められて思いとどまったのですけれども、頻婆舍羅王は結局、食べ物を断られたので餓死してしまったのです。そして父を殺した阿闍世王は自ら王位に即き、そのあとも提婆達多にそそのかされて、例えば象に酒を飲ませてけしかけ、釈尊や弟子達を殺そうとしたりもしたのであります。

提婆達多はこうした悪逆の報いによって、大地が割れて、生きながらにして地獄に墮ちましたが、そのあと阿闍世王は自分の父を殺した罪を悩みに悩むわけです。そこで耆婆大臣に相談したところ、その勧めによって釈尊に帰伏し、帰伏してからは法華經の会座に加わって仏法を深く学ぶほどに、自分の過去の悪業を懺悔する心が強くなったということです。そして釈尊の教団の大檀那となり、王子や夫人も皆、仏弟子となったと伝えられます。

この阿闍世王が五十歳の時の二月十五日、全身に悪瘡ができて、三月七日に死ぬと予告されたのであります。この時、耆婆大臣の勧めによって釈尊のもとに赴き、釈尊が阿闍世王のために月愛三昧に入って涅槃經を説いたところ、悪瘡はたちまちに消えたばかりか、四十年も命を延ばしたということです。

その後、阿闍世王はますます信心を深めて、釈尊の入滅後は仏舍利を供養して大塔を立て、さらには大迦葉を中心とした五百人の比丘を集めて、摩竭陀国王舎城付近の七葉窟で釈尊の遺した經典の第一回結集をしたのであります。また、政治的にも大きな力を振るいまして、周囲の国を併合するなど、中央インドの覇権を握って、仏教の外護に努めたのであります。

大聖人様はこの阿闍世王の例の次に、もう一つ陳臣について述べられております。この陳臣については『可延定業御書』に、

「仏滅後一千五百余年、陳臣と申す人ありき。命知命にありと申して五十年に定まり

て候ひしが、天台大師に値^あひて十五年の命を宣^のべて六十五までをはしき」(同前)と仰せられております。

この陳臣は天台大師のお兄さんと言われている方でありまして、この方は自分の死期が近づいていることを聞いたあと、天台大師の教えを受けて修行することにより、十五年の命を延ばしたのであります。

つまり阿闍世王も陳臣も、釈尊の仏法に値^あって初めて、命を延ばすことができたのであります。大聖人様は、この信心によって阿闍世王は命を延ばしたし、陳臣はこうやって命を延ばしましたよと尼御前に伝えることによって、病身の尼御前を励まされているのです。

そして、このあとに「尼^{また}ごぜん又法華經の行者なり」、あなたもまた法華經の行者でいらっしゃると述べ、さらに「御信心は月のまさるがごとく、しをのみつがごとし。いかでか病^うも失^{いのち}せ、寿^{また}ものびざるべきと強盛^{ごうじょう}にをばしめし、身を持し、心に物をなげかざれ」と仰せになっております。

先に阿闍世王と陳臣の例を引いて定まった命を延ばしたことを挙げ、「尼御前は法華經の行者であり、信心は月の星に勝れるが如く、また潮が満つるが如くに強盛であるから、どうして病を治すことができないことがあろうか、寿命を延ばせないようなことがあろうかと強盛に考え、身体をいたわり、心のなかで嘆くことなく過ぎなさい」と、非常に温かいお心をもって励ましていらっしゃいます。病氣と闘っている尼御前に対して、大聖人様の大慈大悲を深く感ずる御文であります。

もともと、生老病死は世の習いでありまして。しかし強盛なる信心によって、いかなる病氣でも「少病少悩」と転ずることができる大きな功德があるのです。だから私達も、色々な身心の病氣にかかった時に、もちろん医言^みに診てもらふことも大切でありますけれども、まず第一に信心強盛に自行化他の信心に励んでいくということが大事なのです。

自らが題目を唱え、そして世のため人のため、多くの人にこの仏法を下種結縁し、折伏していくということが尊いことなのです。それによって、本当に見違えるように身体が丈夫になることがあります。そのように、信心第一に考えていくことが大事であります。

もちろん、医者にきちんとかかることも大事でありますけれども、その場合においても、御本尊様のお力によって立派な医者に巡り値^あうということがあるのです。

私の知っている御僧侶でありますけれども、ある病氣になりまして、医者からはたいへん深刻な診断を受けたのです。しかし、本当に信心第一にして精進したところ、新しい治療法を教えていただくことができて、今、元のように回復しております。実際にそういうことがあるのです。

ですから私達は、まず御本尊様に対する絶対信を持つことが肝心なのです。無疑^{わっしん}曰信と言うように、疑いの心を持たない。信というのは疑いを持たないことなのです。それで一生懸命に信心修行していけば、病氣が完全に癒^いえることもありますし、または少病少悩と言いまして、その病や悩みも少なくなっていくのです。

この少病少悩というのは仏様の境界でありまして、我々もそれに近づくことができるということでありまして。ですから、何かあったら、なにしろ題目を唱えて、一生懸命に折伏していくことが一番大切だということを、重々御存じいただきたいと思ひます。た

だいま拝読の御文からも、そのことをしっかりと拝することができると思います。

次に、十四番目の『妙密上人御消息』を拝します。

14 妙密上人御消息

国中の諸人、一人二人乃至千万億の人、題目を唱ふるならば存外に功德身にあつまらせ給ふべし。其の功德は大海の露をあつめ須弥山の微塵をつむが如し。殊に十羅刹女は法華経の題目を守護せんと誓はせ給ふ。此を推するに、妙密上人並びに女房をば母の一子を思ふが如く、犍牛の尾を愛するが如く、昼夜にまぼらせ給ふらん。たのもしたのもし。(御書九六九^〆一〇行目)

この『妙密上人御消息』は、建治二(一二七六)年の^{うるう}閏三月五日、大聖人様が五十五歳の時、身延から鎌倉の妙密上人に与えられた御書であります。このお手紙をいただいた対告衆の妙密上人は、鎌倉の^{くわがやつ}福谷に住んでいた方で、この御文から、夫婦共に真剣に信心をしていたことを伺い知ることができます。

本書は、まず「青鳧」つまり銅銭五貫文を御供養されたことに対して、人に食物を施す三つの功德について述べられています。すなわち、

「一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く」(御書 九六四^〆)
という三つの功德があると仰せであります。

次に「日本国へ仏法が伝来してから諸宗の渡来に及んで、月支・漢土は言うに及ばず、本朝にも勝れた人師・先哲が多いにもかかわらず、いまだ末代の凡夫を利する最大の良薬たる妙法蓮華経の題目を唱える人がいないのはどうしてか。仏様は滅後を正像末の三時に分けられたけれども、今は末法、鬪諍堅固・白法隠没の時代である。釈尊の金言が虚妄でなければ、上行菩薩の再誕こそ出現すべきである。今、日蓮は無戒・卑賤の者であるけれども、先師も見給わぬ法華経を開き奉り、□に妙法を唱えてあらゆる迫害に耐え忍んできた。これはまさしく『一切世間^{あだ}怨多くして信じ難し』あるいは『諸^{もろもろ}の無智の人有りて悪口罵詈す』あるいは『刀杖瓦石を加へ或は数々擯出せらる』等の経文にぴたりと符合する。されば今、この法華経の行者を供養する功德は計り知れないことである」とおっしゃっているのであります。

このうち、ただいま拝読をした御文は、ことあるごとになされる妙密上人の尊い御供養の志は、日本国に妙法を弘める人に当たると述べられて、その御供養の功德を讃歎し、信心を勧められているところであります。

まず「国中の諸人、一人二人乃至千万億の人、題目を唱ふるならば存外に功德身にあつまらせ給ふべし」と仰せであります。これは、日本国の人々が一人より二人乃至、千万億人と題目を唱えるようになれば、知らず知らずのうちに、その功德が妙密上人御自身の上に集まることであろうと述べられているのであります。

今はあまり使いませんが、「餓鬼も人数」という言葉があります。この「餓鬼」というのは子供という意味から転じて、弱い者という意味です。つまり、たとえ力の弱い者でも、数多く集まれば^{あなど}侮り難い力になるという意味であります。まして正しい信心をしている人が多く集まれば、それはそれは思いもよらぬ大きな力を発揮することが

できるのであります。

広布への道は、まず異体同心の団結から生まれるということをよくよく知って、一人ひとりが励まし合い、数を増やして広宣流布の道を進んでいくことが大切であると思えます。

次に「其の功德は大海の露をあつめ須弥山の微塵をつむが如し。殊に十羅刹女は法華經の題目を守護せんと誓はせ給ふ」とおっしゃっています。題目を唱える功德は、ちょうど露が集まり、それが積もって大海となる、また微塵が積もって須弥山となるようなものであり、ことに十羅刹女は法華經の題目を守護すると誓われている、と仰せになっているのです。

「塵も積もれば山となる」という言葉がありますけれども、ごくわずかなものでも、数多く積もり重なれば、たいへん広大なものになっていくという譬えであります。我々の信心も同様であります。地道だけれども、朝夕の勤行をはじめ、日ごろの弛ま^{たゆ}ない信心が大事でありまして、この地道な信心、確実な信心がすべての根源であり、これがまた大きな功德をいただく元になるのであります。

『上野殿御返事』には、

「抑^{そもそも}今の時、法華經を信ずる人あり。或^{あるい}は火のごとく信ずる人もあり。或は水のごとく信ずる人もあり。聴聞する時はもへたつばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すはいつもたいせず信ずるなり。此^{これ}はいかなる時^常もつねはたいせずとわせ給へば、水のごとく信ぜさせ給へるか。たうとしたうとし」（同一二〇六頁）

とあります。「水のごとくと申すはいつもたいせず信ずるなり」とあるなかで、「たいせず」というのは後退しない、怠けないという意味です。この御文を我々はよくよく知らなければなりません。

もちろん、火のように強烈な信心が必要な時もあるでしょう。しかし、それが途中で尻すぼみになってしまつては意味がないのです。やる時はすごいだけでも、怠ける時には絶対にやらない。勤行もせず^{とうとう}に寝てばかりで、「やる時はすごいだけでも…」というのではだめです。やはり滔々と流れる水のように、途切れず力強い信心が大事なのです。

「ウサギと亀」という話がありますが、御存じでしょうか。世間の話のなかにも色々な教訓が入っているのだけれども、これは足の速いウサギが寝ている間に、足の遅い亀に追い抜かれるという話です。このように「いつもたいせず」つまり怠けないで、滔々として流れる水の如く、休みなく信心を行っていくということが大事であります。信心の上においては、わずかでも毎日続けるということが極めて大切であると思えます。

さて、ここに十羅刹女の話が出てまいりましたが、この十羅刹女は全部、鬼子母神の子供であります。いわゆる藍婆・毘藍婆・曲齒・華齒・黒齒・多髮・無厭足・持瓔珞・皐諦・奪一切衆生^{こうたい だついつさいしゅじょうしやう け} 精氣の十人でありまして、全部、鬼子母神の娘であります。

この人達は、爾前經では悪鬼とされておりましたけれども、法華經に至って成仏を許され、善鬼となるのであります。そして母の鬼子母神と共に、法華經の行者を守護する諸天善神に列せられるのであります。

『日女御前御返事』には、

「陀羅尼品と申すは、二聖・二天・十羅刹女の法華經の行者を守護すべき様を説けり。二聖と申すは藥王と勇施となり。二天と申すは毘沙門と持国天となり。十羅刹女と申すは十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。又十羅刹女の母あり、鬼子母神是なり」(同 一二三〇)

と仰せになっております。また『経王殿御返事』には、

「此の曼荼羅能く能く信じさせ給ふべし。南無妙法蓮華經は師子吼の如し。いかなる病さはりをなすべきや。鬼子母神・十羅刹女、法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり」(同 六八五)

とありまして、まさに鬼子母神・十羅刹女は法華經の題目を待つ者、つまりこの信心をしている者を守護すると言われているのであります。

さらに、

「十羅刹女の中にも皁諦女の守護ふかゝるべきなり。但し御信心によるべし」(同)と仰せであります。ところが肝心なのです。たしかに、諸天善神が我々法華經の行者を護ってくださるといことはお経にもあり、御書にもありますけれども、我々に信心がなければ護ってくれないのです。だから「なぜ護ってくれないのか」と文句を言う前に、鏡に自分を映して、きちんとした信心をしているか、していないかを調べたほうがいいのです。勤行もしない。折伏もしない、それでいて「護ってくれ、護ってくれ」と言っても、これはだめです。やはり、きちんと信心をしてお願いをするということが大切です。

また、それに続いて、

「つるぎなんども、すゝまざる人のためには用ふる事なし。法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用ふる事なれ。鬼にかなぼうたるべし」(同)

と仰せであります。これは普段、御説法の時などに御住職様から聞いているお言葉だと思いますが、やはり信心が第一でありますから、私達に信心がなければ諸天善神も守護してくれません。法味を捧げなければだめなのです。

さらに『祈祷抄』にも、

「法華經の行者を諸の菩薩・人天・八部等、二聖・二天・十羅刹等、千に一も来たりてまぼり給はぬ事侍らば、上は釈迦諸仏をあなづり奉り、下は九界をたぼらかす失あり。行者は必ず不実なりとも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも威徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし」(同 六三〇)

とあります。この御文は非常に大切です。南無妙法蓮華經と唱えて自行化他にわたる信心をまじめにやっている人は、必ず諸天善神が守護せられるとおっしゃっているのです。

「行者は必ず不実なりとも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも戒徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし」と、仏様からの言いつけを守って、行者を守護せられることになっているのですから、やはり我々の信心次第ということになるのであります。

また、本日はテキストの十三番目の御文から拝読いたしましたが、その前の十二番目に挙げた『上野殿御消息』のなかには、

「然る間 釈迦・多宝等の十方無量の仏、上行地涌等の菩薩も、普賢・文殊等の迹化の大士も、舍利弗等の諸大声聞も、大梵天王・日月等の明主諸天も、八部王も、十

羅刹女等も、日本国中の大小の諸神も、総じて此の法華經を強く信じまいらせて、余念なく一筋に信仰する者をば、影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり。相構へて相構へて、心を翻へさず一筋に信じ給ふならば、現世安穩後生善処なるべし」(同 九二三頁)

ともおっしゃっているのです。このなかに、諸天善神の守護が我々の信心如何によることを説かれております。

「一生懸命やっているのだけれども、どうもおかしいな」と思うような信心では、まだ信心と言わないのです。信心というのは無疑曰信で、疑い無きを信と曰うのです。すなわち「この御本尊様こそ絶対なり」という確信を持って題目を唱えていかなければなりません。信心というのは、そういうことなのです。本当に確信を持って、題目を朗々と唱えていく。そして、題目を唱えた功德と歓喜をもって、また人を折伏していく自行化他の信心をしなければ真実の功德はないのです。

大聖人様は正法・像法時代の論師・人師について、

「自行計りにして唱へてきて止みぬ」(同 一五九四頁)

とおっしゃっております。自分では一生懸命に信心をしているつもりでも、やはり折伏をしなければだめなのです。大聖人様の仏法は自行化他なのです。このことを忘れて「やっているのだけれども、どうも功德がないな」というのは、やっていないのです。胸に手を当ててよく考えてごらんください。皆さんはそんなことはないと思いますけれども、このとおりなのです。

それからまた『乙御前御消息』には、

「妙樂大師のたまはく『必ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し』等云云。人の心かたければ、神のまぼり必ずつよしとこそ候へ。是は御ために申すぞ。古の御心ざし申す計りなし。其れよりも今一重強盛に御志あるべし。其の時は弥々十羅刹女の御まぼりもつよかるべしとおぼすべし」(同 八九七頁)

とおっしゃっております。先程の「余念なく一筋に信仰する者をば、影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり」とのお言葉、さらにこの「人の心かたければ、神のまぼり必ずつよしとこそ候へ」との御文を、よくよく我々は拝すべきだと思います。

つまり、私達の信心が強盛であれば、それに応じて必ず功德が生まれるのです。ですから、御本尊の功德を疑うのではなく、まず自分自身の信心修行そのものに問題があるかないか、一生懸命に折伏をしているかどうか、広宣流布のための戦いをしているかどうかを考えるべきなのです。これがなくて「どうして功德がないのか」などと言ったら、これは罰当たりになります。

しかし、考えてみると、罰が当たるということは、裏を返せば功德が大きいからなのです。それほど、この御本尊様は大きな功德をお持ちあそばされているのです。このことを、しっかりと信じきっていくことが大切であります。

このあと「此を推するに、妙密上人並びに女房をば母の一子を思ふが如く、犍牛の尾を愛するが如く、昼夜にまぼらせ給ふらん。たのもしたのもし」とおっしゃっています。「此を推するに」というのは「十羅刹女は、法華經の題目を唱える人を必ず守護すると誓いを立てていることから推し量って」という意味です。つまり「十羅刹女が法華經の題目を唱える人を守るように、妙密上人ならびに女房殿を、母がその子を思い、犍牛

が尾を愛するように、昼夜にわたって守護せられるであろう。いかにも頼もしいことである」と仰せになっているのであります。

このなかで「犛牛の尾を愛するが如くとありますが、この「犛牛」というのはヤクのことだと言われております。いかなる理由から、ヤクが「尾を愛する」のかということについては不明でありますけれども、法華經方便品に、

「深く五欲に著^{じやく}すること犛牛の尾を愛するが如し」(法華經 一二〇)

とあることから、このように示されたものと拝察いたします。あるいは、前文に「母の一子を思ふが如く」とあることから連動して見るに、同じ意味ではないかと思うのです。つまり、母が一子を思う一念というのは非常に深く、また本当に強いものがありますが、十羅刹女もこの思いをもって、妙密上人と女房殿を昼夜に守護せられるところとなっておっしゃっているのです。

このことは、法華經の安樂行品に、

「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之^{しか}を衛護^{これ}す」(同 三九六)

という経文があります。つまり、諸天善神が法華經の行者の守護を誓っているのでありますから、当文は、題目を唱える者は諸天善神、なかんずく十羅刹女が必ず守護されると仰せられているのであります。

結局、それもすべては信心によるのであります。その意味から、次の十五番目の『妙密上人御消息』の文でありますけれども、

15 妙密上人御消息

金^{こがね}はやけば 弥^{いよいよ}色まさり、劍^{つるぎ}はとげば 弥^と利くなる。法華經の功德はほむれば 弥^と功德まさる。(御書九六九一四行目)

とおっしゃっております。

この御文は、金^{こがね}は焼はばますます色がよくなり、劍は研げばいよいよ切れがよくなるように、法華經の功德は褒めれば褒めるほど、ますます徳が勝れてくるとおっしゃっているのであります。

そもそも信仰とは、仏様を讚歎し、讚仰^{さんごう}することです。つまり、御本尊様の廣大無辺なる功德・力用に心から御報恩謝徳申し上げ、御本尊様の功德を褒め讚^{たた}えるということが大切なのです。言い換えれば、御本尊様に対して絶対的な信を持ち、この絶対信をもって御本尊様を讚歎・讚仰し、強盛に信じていけば、まさしく「祈りとしてかなわざるなし」となるのであります。

では具体的に、いかように御本尊様を讚歎し、讚仰するのか。これは結論的に、既に決まっております。すなわち、自行化他の信心に励むことなのです。やはり、この信心をしているからには自行化他、広宣流布に尽くしていくということを第一に考えなければならぬのであります。

皆さんも御承知の「広布に生きる」という歌がありますが、一人ひとりが本当に仏様の御遺命である広布のために戦っていくという、広布に生きる信念を持つことが非常に大切であります。

つまり、広宣流布の戦いというのは、仏様が私達に託された尊い使命なのです。その

仏様の使命を果たすべく行じていくところに、本当の喜びがあるのです。そしてまた、そこに本当の生き甲斐があるのであり、そこにこそ本当の幸せがあるのです。だから「自行計りにして唱へてきて止みぬ」とあるように、末法においては自行ばかりを一生懸命に行っているだけでもだめなのです。

やはり、広布に生きるという決意が大切なのです。つまり自らが題目を唱えるときに、このすばらしき御本尊様の功德を他に知らしめるために折伏を行じて下種結縁し、もって広宣流布に挺身をしていくことこそが、我々の信心にとって一番大切なことなのであります。

折伏をすると、様々な問題ぶつかるでしょう。おとなしく自分の殻に閉じ籠もって信心をしていたら、何も起こりません。でも、実際に折伏に打って出ると、色々な魔が起きてきます。

しかし、先程も言ったとおり、魔は仏には勝てないのでありますから、必ず魔を打ち破ることができるのです。しかも、そのたびごとに私達は信心の功德を積んでいけるのです。この戦いをしなければ、本当の一生成仏はできないのです。我々の信心というものは自行化他にあるということこそを是非、皆さん方は知っていただきたいと思えます。

本日、登山された皆さんの支部のなかには、既に本年度の誓願を達成した支部もあるでしょう。あるいは、まだ達成していないところもあるでしょう。また、もう少しというところもあるでしょう。いずれにしても、本年度の誓願は必ず達成しなければなりません。それは、今の様々な日本や世界の状況から見て、今、我々がなすべき一番大切なことがそこにあるからなのです。

『立正安国論』の題号に「国を安んずる」とありますが、この「国」というのは日本だけではなく、世界の全部なのです。また小さく言えば、我々を取り巻く世間です。この「国を安んずる」ためにも、今の混沌とした日本の国を救うためにも、さらに世界を救うためにも、本当に私達が心を込めて折伏に励んでいかなければ、この信心をしている意味がなくなってしまうのです。

本日ここに登山された方々はすべて、強信な方々であると思えます。その上から、まだ誓願が達成されていない支部があったら、本当に立ち上がって、今日から折伏に精進していただき、すべての支部が必ず誓願を達成していただきたいということを、心からお願いする次第であります。それによって、一人ひとりが大聖人様から必ずお褒めいただいで、一生成仏を遂げることができるのです。

折伏をすることによってのみ、広宣流布の使命が達成できるということを忘れることなく、これから各支部にお帰りになりましたら、いよいよ強盛に自行化他の信心に励んでいただきたいことを心からお願いする次第であります。

皆様方のいよいよの信心倍増を心からお祈りして、本日の講義を終了いたします。